『一緒にいたい』（ルカの福音書 8 章 26-39 節）2020.5.17.

＜はじめに＞「イエスと一緒にいたい」という願いはクリスチャン共通のものです。ゲラサ地方に住むこの男がこの思いを抱くようになったのは、どうしてでしょうか。今の時代、この思いを持つ人がどのように生きればよいのでしょうか。

Ⅰ　救いを実感する

①イエスに出会う前(27-30)

彼は悪霊・汚れた霊につかれて墓場に住んでいました。衣服もつけずに自分の身を傷つけ(マコ 5:4)、昼夜問わず叫び声を上げていて、人々が止めよう彼を捕えて、鎖・足かせにつないでも断ち切ることを繰り返していました。大勢の悪霊が彼に入っていたからです。

②彼の身に起きたこと(29-38)

イエスは汚れた霊にこの人から出て行くように命じられ、悪霊は豚の群れに移り、悪霊の去った男は服を着て、正気に返ってイエスの足元に座っているのを人々は見ます。そしてその人は「お供をしたい」とイエスにしきりに願いました。

③神がしてくださったこと(39)

クリスチャンは主イエスに救われた者です。そこには必ず変化があります。イエスとお会いして、自分にどんな変化があったでしょうか。自分にはできなかった素晴らしいことを神が成し遂げてくださったと実感するほど、「イエスと一緒にいたい」との願いは高まります。

Ⅱ　犠牲の大きさを知る

①レギオン(29-33)

悪霊が名乗った名はローマの1軍団を指すほど大勢でした。悪霊が懇願して移った豚の群れは、突如崖を下り湖へなだれ込み、溺死しました。その数は 2000 頭ほど(マコ 5:13)でした。それほどの力を持つ悪霊が彼を捕えて、傷つけ苦しめていたのです。

②救いの対価

豚はユダヤでは忌避される食物ですが、その地で飼われていました。彼を救うために、たくさんの豚が死ぬことさえ、主イエスは許されました。救いには犠牲が伴います。私を救うために、誰が、どんな犠牲を払ってくださったかを思い起こせますか。

③犠牲を見る目（34-39）

損害を受けた飼い主たち、この地域の人々が、イエスに出て行ってほしいと願い出ます。「非常な恐れに取りつかれていたから」とは意味深です。一人の救いのために具体的な犠牲・奉仕・献身を求められるとき、私は何と返答するでしょうか。

Ⅲ　救われた意味を知る

①懇願する理由(37-38)

悪霊が去った彼は、イエスがその地を離れようとする際に同行を願い出ます。彼にとって辛く苦しい日々を過ごした地であっても、故郷を離れたいと思うのは余程のことです。それでも地元の厳しい眼差しと主への態度に、彼が決意したとしても不思議ではありません。

②イエスの願い(39)

むしろ、純粋に救われた感謝と喜びから、彼は主について行きたいと願ったのでしょう。しかし主は彼の願い通りではない、別の道を示されます。この町に留まり、神が自分にしてくださったことをすべて、主を去らせた同郷の人々に話す、彼にしかできないことです。

③主が望まれることを選ぶ

彼は自分の願いよりも、主の道を選び取りました。献身とはある働きや立場に進むことではなく、主の思いを受け取り、それに進むことです。そうであれば、献身は一部の特別な人にだけ求められているのではありません。全て救われた者に主は献身を望まれます。

＜おわりに＞ 今日 17 日は聖宣神学院創立 71 周年の記念日です。献身者が少ないのは、時代・世代の差、体制の問題なのでしょうか。自らの救いを喜び感謝し、その犠牲に報いる生き方を求め、主の切なる願いに迫られる関係が築かれているでしょうか。(H.M.)